

翻訳老乞大・朴通事の軽声について

中村雅之

1. 翻訳老・朴の声点

元代の高麗で作られた漢語教科書『老乞大』と『朴通事』に対して、16世紀初に崔世珍がハングルで施した注音は、近世音研究にとって多くの情報を提供する資料であるが、声調に関しても豊富な情報を有している。本文の各字の下に、左右に2種のハングル注音があり、声調を示す点(=声点)が付されている。左側音の声点と右側音の声点が違う原則で構成されていることについては、崔世珍自身による「翻訳老乞大朴通事凡例」(『四声通解』所載)に詳しい。それによれば、左側音の声点は「平・上・去・入」の調類をそれぞれ「無点(平声)・2点(上声)・1点(去声・入声)」で示したものであり、右側音の声点は朝鮮語のアクセントの表示方法(「無点(低い)・2点(上昇)・1点(高い)」)を利用して当時の漢語の調値を示したものである。簡単に図示すれば、以下の通りである。

	左側音	右側音
「無点」	平声	低い
「2点」	上声	上昇
「1点」	去声・入声	高い

漢語の声調は、伝統的な調類(平・上・去・入)においても、当時の北方漢語の体系(陰平・陽平・上・去)においても4種類であったが、一方ハングルに付される声点には3種類しかない。左側音においては、去声と入声がともに「1点」であるが、入声には入声韻尾らしきもの(河野式転写では「'」と「v」)が綴られるため、混乱はない。しかし右側音では陰平声と去声がいずれも「1点(高い)」であり、声点だけでは区別は困難である。具体的には各声調ごとに以下のような声点が付されることになる。

例字	当時の北方の調類	伝統的な調類	左側音の声点	右側音の声点
「哥」	陰平	平声	無点	1点
「従」	陽平	平声	無点	2点
「老」	上声	上声	2点	無点
「去」	去声	去声	1点	1点
「乞」	去声	入声	1点	1点
「月」	陽平	入声	1点	2点

2. 右側音の軽声

本稿で問題とするのは軽声である。当時の漢語の中に軽声が存在したことについては、すでに遠藤光暁(1984)が『老朴集覧』に引かれた『音義』の記載を紹介している。その記載によれば、虚辞の「那・也・了・阿」などの字はみな軽く弱く発音し、付屬的にサツと読むだけだという(「...助語的那也了阿等字都輕輕兒微微的説、順帶過去了罷」。まさに軽声にはかならないが、遠藤氏も指摘するとおり、当時の虚辞はまだかなりもとの声調を保っている場合があって、常に軽声化していた訳ではないようである。

崔世珍の「翻訳老乞大朴通事凡例」に、軽声についての注記と読める箇所がある。その

「旁点」の条であるが、上声の字が二つ続く時には読み方が二通りあって、一つは上の字を平声濁音 (= 陽平声) に読む [= 連読変調]、もう一つは下の字もしくは上下二字が虚辞の時に下の字を去声に読む、というものである(「...若下字為虚或兩字皆語助、則下字呼為去声」)。上述の『音義』の虚辞(「助語」)の記述と合わせ見れば、崔世珍が「去声」と称したのが軽声であることはほぼ明らかである。実際、上声が連続する場合の右側音の声点は、特に下の字が虚辞である場合に上字「無点」、下字「1点」であることが多い(例えば、「打了」「好了」「李子」「口裏」「(待天明)了也」など)。

ここで問題になるのは、この下字の「1点」が軽声ではなく、真に「去声」である可能性はないのか、ということである。その場合、当時の「上声+上声」の連読変調には二種あり、何らかの条件で(あるいは無規則に)時には「陽平声+上声」になり、時には「上声+去声」へと変調したことになる。しかしながら、以下の例のように、軽声と疑われる「1点」が右側音に現れるのは「上声」の後に限られておらず、また、自らが必ずしも「上声」である訳でもない。

- a) 「告了(1点+1点)」「出了着(1点+1点+2点)」「好些了(無点+1点+1点)」「小厮們(無点+1点+1点)」「漢兕人(1点+1点+2点)」

a)は、上声以外の字の後に「了」が続いている例、b)はもともと上声でない字に「1点」が付いた例。これらの例から、崔世珍の言う「去声」は連読変調なのではなく、軽声化を述べたものと考えることができよう。なぜ「去声」と表現されたかと言えば、崔世珍は軽声化した音節がやや高めに(ただし軽く)発音されると認識したために、去声に最も調値が似ていると感じたのであろう。

なお、右側音において、軽声の表示(すなわち「1点」)は、必ずしも徹底してはいない。最も安定して「1点」で示されているのは、上に挙げた「們」である。この字は現代では時に第2声で読まれることもあるが、老・朴の右側音に「2点(=上昇調)」で示された例はない。そのほかに軽声を表すと思われる「1点」が付されているのは、以下のようなものであるが、「麼」以下の例では軽声は稀に露出するに過ぎない。(「1点」の出現回数は遠藤光暁(1990)によって検索した)

- 「們」全 178 例中、1点 174 例、無点 4 例。
「了」全 387 例中、無点 303 例、上声の後の1点 76 例、非上声の後の1点 8 例。
「裏」全 391 例中、無点 336 例、上声の後の1点 55 例、非上声の後の1点なし。
「子」全 359 例中、無点 307 例、上声の後の1点 42 例、非上声の後の1点 10 例。
「麼」全 241 例中、2点 235 例、1点 4 例、無点 2 例。
「頭」全 167 例中、2点 165 例、1点 2 例。
「兕」全 277 例中、2点 270 例、1点 5 例、無点 2 例。
「来」全 384 例中、2点 373 例、1点 9 例、無点 2 例。
「人」全 346 例中、2点 337 例、1点 5 例、無点 4 例。
「着」全 366 例中、2点 355 例、1点 10 例、無点 1 例。

以上が主な例であるが、「們」および「麼」以下に「無点」が現れるのは、おそらく誤って声点を脱したものであろう。なお、「箇」のようにもともと去声であるものは、軽声化しているか否かを声点から探ることはできないので、上には挙げていない

3. 左側音の轻声

左側音の声点は、上述のように、単に「平・上・去・入」という伝統的な調類を示すだけであるから、理論的には轻声の表示などなされるはずがない。しかし実際には、右側音と同様に、「1点」を以て轻声化を示したと見なすべき例がしばしば見られる。ただし、そのような表示は「們」を除けば徹底したものでなく、端なくも露見した程度のものであること、右側音の場合と同じである。以下に轻声化に関わる左側音の状況を示す。

「們」全 178 例中、1点 169 例、無点 8 例、2点 1 例。

「了」全 387 例中、2点 360 例、上声の後の 1点 7 例、非上声の後の 1点 16 例、無点 4 例。

「裏」全 391 例中、2点 374 例、上声の後の 1点 3 例、非上声の後の 1点 11 例、無点 3 例。

「子」全 359 例中、2点 346 例、上声の後の 1点 1 例、非上声の後の 1点 9 例、無点 3 例。

「麼」全 241 例中、無点 238 例、1点 2 例、2点 1 例。

「頭」全 167 例中、無点 159 例、1点 7 例、2点 1 例。

「兒」全 277 例中、無点 274 例、1点 2 例、2点 1 例。

「来」全 384 例中、無点 381 例、1点 2 例、2点 1 例。

「人」全 346 例中、無点 343 例、1点 3 例。

「着」については、右側音では基本声調が「2点 (= 上昇調)」であったため、轻声化の資料たり得たのであるが、左側音ではもともと「1点 (= 入声)」であるから、轻声化の資料としては無力であり、ここには挙げていない。

興味深いのは、「了」「裏」において、非上声の後で轻声化する例が右側音の場合よりも多く示されていることである。この点から見ても、左側音の轻声表示は重要視されてよい。

「麼」から下の例は、これのみを以て轻声化の証左とするには甚だ心許ないが、右側音における表示と合わせ見るならば、多少の意味は有するものとする。

なお、左側音のハングル表記は 15 世紀半ばの申叔舟の『四声通考』の俗音を転載したものと崔世珍自身が述べているが、上に見えるような轻声の表記は、当然のことながら申叔舟のものではない。『四声通考』は韻書であって、轻声の情報を含んでいたとは考えられないからである。轻声表示は崔世珍（もしくは編纂に関わった誰か）が声点を書き込む際に、ある部分は意図的に、またある部分は無意識的に記したものであろう。『老乞大』と『朴通事』を合わせれば相当の分量になる。その全てに 2 種類の声点を付す作業をし続ける際には、おそらく実際に自ら発音をしながら記したであろうから、いかに注意深く作業をしても、文の構造や語の配列に応じて、つい無意識的に轻声を表示してしまうことがあったと考えられる。

< 参考文献 >

遠藤光暁 (1984) 「 翻訳老乞大・朴通事 里的漢語声調」『言語学論叢』13

遠藤光暁 (1990) 『 翻訳老乞大・朴通事 漢字注音索引』好文出版